

マザー・グースの中の植物

池 田 広 昭

Plants in Mother Goose

Hiroaki IKEDA

Abstract

All the plant names in 1,188 Mother Goose nursery rhymes have been listed together with the frequency of their appearances and classified by their uses in everyday life. Also, the rhymes with plant names have been counted to be compared with those having animal names. The results have indicated that relatively a large number of useful plants such as herbs, spices, fruit, nuts, grains, and vegetables are contained in Mother Goose, but that there are much fewer "poetical" plants whose beauty people may enjoy in recognizing changes of the seasons. It has been revealed as well that Mother Goose prefers songs about animals to those concerning plants. This tendency has been found to be common with other English proverbs or even Beattie's lyrics.

1. は じ め に

英国の伝承童謡 Mother Goose または Nursery Rhyme の唄に唄い込まれている植物に関して、その種類と唄に登場する頻度を調べた結果を報告する。Mother Goose に出てくる植物の使用状況を通して、あるいは英国の庶民の植物とのかかわり方、ひいてはその自然観の一端が垣間見られるのではないかと期待するものである。

2. 資 料

調べるための資料としては Iona and Peter Opie 夫妻の編になる *The Oxford Nursery Rhyme Book*¹⁾ と 宮川幸久・外山滋比古編 *A Handbook of Nursery Rhymes*²⁾ を用いた。Opie 夫妻の著書は現在最も定評ある英国伝承童謡の集成であり、800 の唄が収録されており、この方面の基本図書である。宮川・外山の *Handbook* はこの Opie 夫妻の著者などをもとにこれに収録されていない童謡を補ったもので、おそらく現在、内外を問わず最も網羅的な集成であろう。

主として索引をもとに両書の収録童謡を照合してみると、*The Oxford Nursery Rhyme Book* に収録され

ている童謡で *A Handbook of Nursery Rhymes* に収録されていないものが 70 見いだされる³⁾。あるものは方言性が強い、またあるものは同じ唄の別の version が収録されているために採用されなかったものと推測されるが、収録されなかった理由の不明のものもある。1,118 にこの 70 の唄を加えた計 1,188 の童謡を調査対象とすることにした。この 1,188 の中に含まれていない童謡や version も当然存在し、それらには mulberry, furze, white pink などの植物が出てくるが、今回、これらは調査の対象からはずした。

3. 方法 と 方針

A Handbook of Nursery Rhymes は Volume I : Text と Volume II : Concordance の 2 分冊より成り、Concordance は 1,118 の唄に使われている単語のうち、'function words', 'anomalous finites', 'pronominal adverbs' を除くすべての単語とその使用箇所が載っており、今回のような調査目的には好都合である。しかし、Concordance には少数の記載漏れと誤記がみられるので、調べ方としては、まず最初に *The Oxford Nursery Rhyme Book* と、*A Handbook of Nursery Rhymes* の Text の原文に直接あたることとし、Concordance のほうはそうして得られた結果に調べ忘れないか確認するための補助手段として用いることに

した。

調べる事項はどのような植物がどのくらい多く現れるかという2点であるが、植物を拾い出すに当たっては次のような方針に従った。

一、個有名詞として使われている植物名はそれが文脈上植物を特に意味していないと考えられる場合は採らない。例えば、

Little Miss Lily, you're dreadfully silly
To wear such a very long skirt ;

.....(以下略) (425)⁴⁾

における Lily は採らない。その他、Charley Barley や Thistledown など同様に採っていない。これは日本では例えば「おうメさん」、「おキクさん」、「松山」などに相当する。

二、囃子ことばや掛け声などに使われているものは採る。例えば、

Can you make me a cambric shirt,
Parsley, sage, rosemary, and thyme

.....(以下略) (618)

にみられる、parsley, sage, rosemary, thyme は採っている。あるいは、

Intery, mintery, cutery, corn,
Apple seed and briarthorn,

.....(以下略) (496)

の corn のようなものは採ってある。

三、唄の内容がある植物をはのめかしている場合でも、はっきりその植物の名が出てこない場合は採らない。これは主として次のような riddle に当てはまる。

Patches and patches
Without any stitches ;
If you tell me this riddle
I'll give you my breeches. (1021)

(答えは A lettuce)

As white as milk
And not milk ;
As green as grass,
And not grass ;
As red as blood,
And not blood ;
As black as soot,
And not soot. (1038)

(答えは A blackberry (From blossom to full ripeness))

以上のような2つの例の場合、lettuce と black-

berry は植物の使用例としては採らないわけである。

四、植物とすべきか否かの境界線上のものは個々の例において適宜取捨した。

五、植物名の出現頻度は2通りの数え方をする。まず、ある植物がいくつの童謡に使われているか数える。次に、一つの唄という枠をはずして、ある植物名がトータルで何回使われているかを調べる。例えば、with a rowley, powley, gammon and spinach という句が14回現れる一つの唄がある。こういう場合、spinach の使用頻度は唄という単位に関しては1回、唄という単位をとり払った場合は14回となる。この例のように Mother Goose には長い唄もあれば、わずか10語程度よりなる短い唄もあり、一つの唄というものの姿が一定しない面がある。しかし、結果をまとめるに当たっては唄を中心とした頻度に重点を置き、単純な使用頻度のほうは補足的資料とする。その理由は今の例のように、仮に一つの唄にある植物が14回出てきたとしても同じ句のリフレインのような形が多く、実質的には1回とみるほうが妥当に思われる場合が多いからである。

4. 結 果

植物の種類と頻度を調べた結果は以下に示すとおりである。ここでは植物であっても tree や weed のように指し示す範囲の広いものは除いてある。どこまでを以下のリストに載せるべきかは客観的基準が設定しがたく、採るべきかどうか迷ったものもいくつかある。また、1,188の Mother Goose 中の植物と認められるものはできる限り網羅的にとりあげるように心掛けたが、一部植物とすべきか否か語学的に判断できないものがあり、それらはリストに載せられていない。

リストは頻度の高いものから順に示してある。同一頻度のものが複数存在する場合はアルファベット順になっている。かっこのつかない数字がいくつの唄に使われているかを示す数字で、かっこ内の数字がその植物名が一つの唄という枠をはずしてトータルで何回使用されているかを示す数字である。かっこ付きの数字のないものは両方の数字が一致しているものである。

複合語の1成分として植物名が現れた場合はその旨をことわずにリストに載せてある。例をあげれば、cornfield, gingerbread, oatmeal の1成分である corn, ginger, oat は複合語の一構成要素であることをことわずそれぞれの項目におさめられている。

英語の植物名に対する日本語訳はおおまかなもので植物学的厳密さはない。

それぞれの植物がどのような使われ方をしているか、いちいち例をあげて示すことができればよいのであるが、不必要に長くなることを恐れてさしひかえる。

{ apple リンゴ36, (52) }	37, (53)
{ applety リンゴ, apple の変形 1 }	
plum セイヨウスモモ	20
corn 穀物。英国では主にコムギ ...	18, (19)
{ rose パラ15, (19) }	17, (21)
{ rosy rose の形容詞 2 }	
cherry サクランボ.....	11, (19)
grass 主にイネ科の単子様類	11, (12)
oak オーク, カシ	11, (13)
pear セイヨウナシ	11, (21)
tea チャ	10, (13)
lily ユリ	8, (12)
barley オオムギ.....	6
clover クローパー.....	5
{ pea エンドウ 2, (3) }	5, (10)
{ pease エンドウ 3, (7) }	
pepper コショウ	5, (8)
{ ash セイヨウトネリコ ... 3, (4) }	4, (5)
{ ashen ash の形容詞 1 }	
bean 豆。インゲンマメなど	4, (5)
coffee コーヒー	4, (5)
ivy キツタ	4, (18)
potato ジャガイモ.....	4
thorn イバラ	4, (5)
turnip カブ.....	4, (5)
bramble イバラ。特に blackberry ク ロイチゴを指す。.....	3
cork コルク。Cork oak の外皮	3, (4)
daisy デイジー, ヒナギク	3, (4)
ginger ショウガ.....	3
nut 堅果。クルミを指すことが多い。...	3, (4)
pumpkin セイヨウカボチャ	3, (5)
sage セージ	3, (10)
strawberry イチゴ	3
thistle アザミ。ノゲシのように黄花 でもとげのあるものは thisle の仲間 である。.....	3, (10)

violet スミレ	3
cinnamon シナモン	2
cotton 綿.....	2, (3)
currant フサスグリ	2, (5)
hickory ヒッコリー	2, (3)
holly セイヨウヒイラギ	2, (6)
lavender ラヴェンダー.....	2, (5)
mustard カラシ (ナ)	2
nutmeg ナツメグ, ニクズク	2
oat オートムギ, カラスムギ	2
orange オレンジ	2, (3)
parsley パセリ	2, (9)
rice イネ, 米	2
rosemary ローズマリー	2, (9)
rye ライムギ	2
tabacco タバコ	2
wheat コムギ.....	2
acorn ドングリ。Oak の果実.....	1
barberry ヘビノボラズ	1
berry 液果, 漿果。主にイチゴ類 ...	1
briar ノバラ。Dog rose など。.....	1, (2)
broom エニシダ.....	1, (2)
buttercup ウマノアシガタの類	1, (2)
cabbage キャベツ	1, (4)
caper セイヨウフウチョウボク	1
carrot ニンジン.....	1
chestnut クリ.....	1
clove チョウジ	1
collyflower カリフラワー	1
Daffy-down-dilly ラップズイセン, すなわち daffodil のこと	1
ebon コクダン	1, (2)
elecampane エリカンペイン, オオグ ルマ.....	1
fig イチジク	1
fir モミ.....	1
groundsel ノボロギク	1
hawthorn サンザシ。May とも呼ば れる。.....	1
hazel ハシバミ	1
hempen hemp の形容詞。アサ, 特に タイマ.....	1
kail チリメンキャベツ	1
lemon レモン	1

marigold	マリーゴールド	1
may ⁵⁾	サンザシ hawthorn のこと	...	1
melon	メロン	1
moss	コケ	1
nettle	イラサク	1
onion	タマネギ	1
peach	モモ	1
pippin	ピッピン	1
poppy	ケシ	1
primrose	サクラソウ。主に黄色の花 をつける種を指す。	1
quince	マルメロ	1
sorrel	スイバ	1
spinach	ホウレンソウ	1, (14)
thyme	タイム	1, (8)
walnut	クルミ	1
wineberry	ウラジロイチゴ	1
woodbine	スイカズラの仲間	1
yarrow	セイヨウノコギリソウ	1

以上 88 種の植物名が 1,188 の Mother Goose にみられた。

5. 結果の検討

いくつかの角度から以上の結果に検討を加える。

5・1. 使用頻度の高い植物

使用頻度の高いものはその植物に対する英国人の嗜好性の高さやその植物の英国の日常生活との結びつきの強さを示すと言ってよいであろう。しかし、その逆は必ずしも真ではない。英国によく見られる、あるいは Mother Goose が成立するところ見られたと思われる、beech (ブナ), plane (プラタナス), elm (ニレ), almond (アーモンド), mint (ミント), grape (ブドウ) などの植物は 1 回も、今回調べた Mother Goose には現れない。また、リストの上で頻度が低くても、その植物の出ってくる童謡が民衆の間で唄われる頻度が高ければ、実際は高頻度の植物に匹敵すると見なし得ることも考慮する必要があるであろう。

Mother Goose の唄の中には一部アメリカで成立したことが確認されているものがある。しかし、そういう唄も英国に入ってから定着しているし、他は皆英国で出来たものであるから、Mother Goose すなわち英国と

考えて大きな誤りはないであろう。

いずれにしても、リストの上で頻度の高いものは英国人の生活と関係が深く、それだけその植物に対する関心も強いと思われる。そこで高頻度の植物を apple から lily まで順に簡単に検討し英国人とのつながりを探ってみることにした。

apple: 英国には野性のリンゴが自生している。これは Crab apple (*Malus sylvestris*) と呼ばれる小果品で、これに改良が加えられて現在のような大果品が作られた⁶⁾。上記のリストに頻度 1 とし載っている pippin も一種の野性リンゴである。世界的に見ても英国はリンゴの品種改良の本場である。したがって、人々のリンゴに寄せる思いが強く、Mother Goose では圧倒的に頻度の高い植物として現れることになったものと思われる。リンゴにまつわる旧約聖書の話がすぐ思い浮かぶが、Mother Goose にリンゴの出ってくる唄が多いのはそのためというよりは、生食用の果物や、ゼリー、ジャム、アップルパイ用の原料としての食品面からの関心が強いためではないかと思う。53 回 apple (およびその変形の applety) という語が使われているが、そのうち apple tree として出てくるのは 3 回だけで、apple pie など加工食品として出てくるのが 12 回である。残りが果物としての用法である。

plum: 英国に自生種があり Cherry plum (*Prunus cerasifera*) と呼ばれる。これをもとに改良された品種が果物として、またジャムなどの原料として栽培されているようである。Mother Goose に登場する plum は英国人の非常に好む plum cake や plum pudding などのようなお菓子の類の名称に使われていることが多い。リストの 20 回とある使用例のうち 9 例がそれに相当する。この plum cake や plum pudding は名に plum とはついているものの実際には raisin や currant などが使われており本当の plum は使われていない。Mother Goose の唄が作られたころの時代には本当の plum が使われていたのかも知れないが、現在ではまぎらわしい名称になっている。したがって、20 の用例のうちいくつを本物の plum とすべきか判断しにくくなっている。なお、20 回のうち plum tree として使われているのは 2 回である。

corn: 穀物のことであるが英国では主に wheat を指す。他にも同じ麦の仲間である barley, oat, rye を指

すこともある。なかでも barley を指すことが多いようである。麦は日本の米に相当する重要な英国の穀物であるから corn の出現頻度が高いのはよく理解できる。

rose: 英国には野性のバラが多いようである。日本人からすると西洋の花としてすぐ思い浮かぶのがバラである。したがって Mother Goose にバラが多く登場するからといっても特に不思議には思わない。しかし、西洋といえども、野性のバラには色とりどりの派手な八重咲きの大輪の花をつける種類はない。日本のノイバラやテリハノイバラに近い、花弁も一重で花径も比較的小さい、白色またはピンクのバラが自生しているようである。野性のバラで比較的花が大きいのは Dog rose (*Rosa canina*) で、花の色は薄いピンクで花径は 5 cm くらいある。他に Burnet rose (*Rosa pimpinellifolia*), Field rose (*Rosa arvensis*), Downy rose (*Rosa tomentosa*) などの自生種がある。Dog rose はその果実を料理に使ったり薬用としたりする。バラは西洋人の非常に好むものであり、非常に古くから観賞用の園芸品種が作り出されている。こういうことから考えると Mother Goose の中のバラが野性のバラか園芸品種か判断しにくい。

cherry: 英国には Wild cherry (*Prunus avium*) が自生し、それをもとに改良品種が作られている。果物としても加工食品の原料としても英国人の好むものである。Mother Goose には cherry tree という用例は三つしかない。そのうえ、その花 cherry blossom に言及する用例は一つもない。この点、日本人の感覚とのずれがある。

grass: 主として葉の細い単子葉類の植物を指す。イネ科の植物と考えてよいであろう。他にカヤツリグサ科なども指し得るであろう。日本語の「草」より指示する範囲が狭い。Grass は牧草になる。

oak: 特定の 1 種類の植物を指すのではなく、ブナ科コナラ属に属す樹木は皆 oak と呼ばれる。ドングリ acorn のなる木である。英国で最も一般的な樹木と言えるであろう。紅葉したのち落葉する。良い建材となる。

pear: 英国にはもともと自生種がなく、古い時代に

ヨーロッパ大陸から渡来したとされる。古くに Common pear (*Pyrus communis*) と呼ばれる種が果樹園から逃げ出して自生しているという。この改良品種が非常に古くから果物用にあるいは加工食品用に栽培されている。言うまでもなく、日本で普通に見られる球形のサクサクするナシとは別種である。

tea: coffee, tobacco などとともに植物とすべきかどうか迷ったものの一つである。Mother Goose において、植物ということ意識して使われた例は全くない。すべて嗜好飲料としての tea である。Pepper や mustard を採るなら同様の扱いをすべきだと考えてリストに載せることにした。Tea ということばそのものが中国語に起源をもつ語であることからわかるように英国には自生種はない。Mother Goose において coffee より使用頻度が高いのが注目される。

lily: 日本はユリ王国であり、神奈川県は県花になっているヤマユリをはじめ、カノコユリ、コオニユリ、スカシユリなど花径が非常に大きくりっぱなものが野山に自生している。したがって、北ヨーロッパにも野生のユリが豊富にあると思いがちであるが、野生のユリの仲間では花がりっぱなものは 2 種位しかないらしく、普通、素人向けの図鑑類には載っていない。まれにしか見られない種なのであろう。英語ではスズラン、カラー、水蓮のようなものまでが lily の名をもって呼ばれる。そして lily と言えばスズランと解されることも多いようである。江戸時代に日本から各種のユリを輸入しそれを園芸用に改良したものが普及しており、日本に逆輸入されている品種もある。ユリは『新約聖書』でもおなじみであるが、この場合はスズランのことと解されている。Mother Goose では美人や白の比喻として使われている例も少なくないが、この場合の lily もスズランのことかも知れない。日本のヤマユリのような大きな花の白百合は英国には自生していないのだから、Lily-of-the-valley と呼ばれるスズランが lily の代表であってもおかしくない。

5・2. 植物の分類

頻度に関係なくどのような種類の植物が Mother Goose に現れるのかに着目すると、おのずからいくつかのグループにまとまる。ここでは自然分類ではなく、用途という観点からまとめてみた。一つの植物が二つ以上の項目に分類されている場合もあり、また見方に

よっては二箇所に入れてもよいものでも、より重要と思われるほうの項目一箇所にしか分類しなかったものもある。

風味用植物

薬用 (herb)

薬草としてだけでなくハーブティー、調味料、香料などとしても用いられる。花が観賞に耐えるものもある。

barberry, clove, elecampane, lavender, rose, rosemary, sage, thyme, violet, yarrow

薬味 (spice)

caper, cinnamon, clove, ginger, marigold, mustard, nutmeg, onion, parsley, pepper, violet

嗜好料

coffee, tea, tobacco

果実用植物

フルーツ 水分の多い果実

apple, barberry, berry, bramble, cherry, currant, fig, hawthorn, lemon, may, melon, orange, peach, pear, pippin, plum, quince, rose, strawberry, wineberry

木の実

acorn, chestnut, hazel, hickory, nut, walnut

野菜用植物

barberry, bean, cabbage, carrot, collyflower, elecampane, kail, onion, pea, pease, potato, pumpkin, sorrel, spinach, turnip, yarrow

穀物用植物

barley, corn, oat, rice, rye, wheat

繊維用植物

cotton, hemp (en), nettle

木材用植物

ash, cork, ebon, fir, hickory, holly, oak

牧草用植物

clover, grass

観賞の要素の強い植物

野性植物であっても Mother Goose がその花の美しさに注目していると思われる植物をここに集めた。

bramble, briar, broom, buttercup, Daffy-down-dilly, daisy, hawthorn, lily, marigold,

may, poppy, primrose, rose, violet, woodbine

雑草

特に人間に役立ちもせず、ものによっては積極的に害を及ぼす植物。低木も入れた。

groundsel, ivy, moss, nettle, sorrel, thistle, thorn

以上のようにまとめてみた。

分類以前の問題であるが、分類するにあたって、まず分類対象の植物が少ないという印象を強く受けた。1,188 の童謡を調べたにしては少ないと感じたのである。先に述べたように約 90 種の植物名が Mother Goose に現れる。この数字が多いのか少ないのかはこの数字だけを見ていたのでは判断できない。比較の対象が必要である。そこで比較の対象として町田嘉章・浅野健二編『わらべうた』⁷⁾を用い日本の童謡を調べてみた。この本には日本に 2 万以上もあると言われる伝承童謡のうち代表的なものが 160 収録されている。数は少ないが代表的なものを選んであるだけにかえて日本の童謡の性格を浮き彫りにするのに好都合ではないかと思う。

『わらべうた』を調べた結果、160 の唄に使われている植物は約 100 種類であることがわかった。Mother Goose は 1,188 (その中には日本の童謡よりかなり長い唄もある)で約 90 種であるから、少ないと言ってもよいであろう。Mother Goose の中に植物が少ないと感じたのも理由のないことではなかったわけである。童謡の世界では日本のほうが英国より植物に示す関心が高いと言えそうである。

植物の分類に話をもどすと、まず気付くのは食用植物や工芸植物などのいわゆる有用食物が非常に多い、その反面、花や姿を見て楽しんだり、それを見て季節の移り変わりを感じとるような、日本で言えば俳句の季語的扱いの植物が少ないということである。もっと風流な植物が多いことを予想して調べたのだからその期待は少し裏切られたかっこうで、ことのほか実用的植物が多いという結果を得た。

前出の『わらべうた』を調べるともっと風流な観賞的要素の強い植物が多く見られる。たとえば、松、藤、桔梗、かきつばた、橘、躑躅、牡丹、椿、南天、山吹、桜、桃の花、芍薬、菊、梅、水仙、竹、たんぽぽ、すみれ、菜の花、柳、蓮華などの顔ぶれが見える。樹木の名前も Mother Goose より多い。そのうえ、Mother

Goose には見られない海藻が登場する。その反面、Mother Goose ほど風味用植物と果実用植物が多くない。

このように童謡において関心の示されている植物が英国と日本で違うということは、両国の文化的背景の違いをはのめかす。庶民レベルでの植物に対するとらえ方が日本では風流好みの傾向を見せるのに対し、英国では実用的なものへの関心が強く、特に料理に関係した植物への関心が高いと言えるであろう。

英国でも風流な感覚をもって植物を見る人がいないわけでは決してなく、小説や詩歌などには博物学的知識をもって植物を記述したものが少なくない。Edith Holden の *The Country Diary of an Edwardian Lady* のような極めて美しい本もある。しかし、童謡にそれがあまり反映していないのは、特異なまでに繊細な文学者たちと一般庶民の間にあるいは少しギャップがあるからかも知れない。日本では俳句や和歌といったものがその格差を埋めるのに大いに役立っているようである。新聞の一面に詩歌観賞のコラムがあるのは日本ならではのことらしい。

上述のように、Mother Goose には apple, plum, cherry, pear の使用頻度は高いのに明らかにその花に言及しているとわかるものは全くない。また、実の熟す時期から季節を感じるといった様子も見られないようである。このようなところにも季節感に欠ける特徴が見られる。しかし、歳時記的な植物の童謡が全くないわけではなく、かえって日本の童謡にないくらい詩的に季節を唄ったものがある。二つだけ引用しておく。

April brings the primrose sweet,
Scatters daisies at our feet. (25)

Buttercups and daisies
Oh what pretty flowers,
Coming in the springtime
To tell sunny hours.
While the trees are leafless,
While the fields are bare,
Buttercups and daisies
Spring up everywhere. (31)

『わらべうた』にはこれほど季節感豊かに花をたたえたものはないが次のような唄がある。

…………… (前の部分略) ……………

三月は三月は お雛飾りに糸 葱 臍 ^{あさづきなアサス}
お内裏様の桃の花 桃の花
四月は四月 花を見たくば釈迦堂に御座れ
花は色々躑躅に椿 よれてからまる
藤の花 藤の花
五月は五月は 御門々々に小旗を立てて
軒端々々に菖蒲をさして
小供寄り合い 花合戦 花合戦⁸⁾
…………… (以下略)

(『わらべうた』 p. 20)

花と月を対応させているところがなにやら花札を連想させるが、花札などは日本の庶民の季節感の典型であろう。

季節感とは関係ないが日本の童謡の植物好きを示す典型的な例があるので引用しておく。

無花果 人参
山椒に 椎茸
午莠に 無患子 ^{むくろじゅ}
七草 初茸
胡瓜に 冬瓜⁸⁾ (『わらべうた』 p. 47)

他にも類似の唄がある。このように最初から最後まで植物で成り立っている唄は Mother Goose にはない。

5・3. 植物の唄の占める割合

植物の種類と分類を通して Mother Goose についての検討をしたが、1,188 の唄のうち植物が出てくる唄が何割くらいあるのか調べてさらに検討をすすめた。

植物名が出てくる唄の割合を調べるに際しては、tree や weed など指示するものが広いのも植物と認め、一つの唄に何種類かの植物が登場する場合でも一つと数えてある。

さらに、植物の出てくる唄の比重を際立たせるために動物の出てくる唄も調べてみた。動物の中には哺乳類、鳥類、魚介類、昆虫、両生類、爬虫類、その他を含めている。植物と同様一つの唄に何種類出てきても一つと数えてある。また、植物と動物の両方が出てくる唄は、植物と動物の両方の計算に入れてある。その他、植物と動物のどちらとも無関係の唄も調べてみた。

この作業を Mother Goose と『わらべうた』に対して行ったが、Mother Goose に見られる傾向が Mother

Table 1. The use of plant and animal names in British and Japanese nursery rhymes, proverbs, and Beatles

		Mother Goose (1188)	Warabeuta (160)	English Proverbs (800)	Beatles Lyrics (189)
The percentage of songs or proverbs containing plant or animal names	Plants	24%	46%	5%	11%
	Animals	Mammals	19%	—	—
		Birds	23%	—	—
		Fishes and Seashells	7%	—	—
		Insects	9%	—	—
		Others	2%	—	—
		Total	51%	12%	14%
	Neither Plants nor Animals	49%	26%	84%	78%
The total number of species used	Plants	about 90	about 100	a few more than 10	a few more than 10
	Animals	about 140	about 50	a little fewer than 40	a few more than 25

Goose だけのものなのかどうか確認するめ、英国の本を他に 2 冊選んで調べてみた。その本の 1 冊は *English Proverbs Explained*⁹⁾ で 800 のことわざが収録されている。もう 1 冊は *The Beatles Lyrics*¹⁰⁾ で Beatles の歌詞 189 が載っている。ことわざからは英国の伝統的な傾向を、そして Beatles の歌詞からは現代の英国の傾向を探ろうと考えたわけである。

以上の他に全部で何種類の植物名と動物名が使われているかも併せて記したのが Table 1 である。Mother Goose と『わらべうた』に関しては動物の部分を少しこまかく調べた。表中の数字は厳密なものではない。また、当然のことながら、動物のトータルのパーセンテージは哺乳類、鳥類、……のパーセンテージの合計値ではない。一つの唄には何種類かの動物が重複して出てくる場合があるからである。

この表の数字は、Mother Goose は植物より動物のほうにより強い関心があることを示している。動物の唄のほうが多いうえに動物の種類も植物を 50 種ほど上まわっている。これを『わらべうた』と比較すると、『わらべうた』では植物の唄が 46% と Mother Goose よりかなり多く、登場する植物の種類も収録唄数から考えると相当多い。一方、『わらべうた』には動物の唄も多く 51% に達している。しかし、登場する動物の種類は約 50 種であり、植物の約半分である。植物と動物

の唄の数はほぼ同じであるから、植物に対して、よりこまかい注意が払われていると言えよう。

全般的にみて『わらべうた』のほうが生物の唄が多く、動物か植物の出てくる唄は全体の 3/4 ぐらいに達し、Mother Goose の約 1/2 という数字を上まわる。『わらべうた』の収録唄数はあまり多くないからこの数字の有効性はあまり高くないかも知れないが、Mother Goose の動物好み、『わらべうた』の植物好きの傾向は動かせないところであろう。

Mother Goose の動物好みの傾向が Mother Goose だけのものではないらしいということが、英国のことわざと Beatles の歌詞を調べた結果からわかる。ことわざも Beatles の歌詞も Mother Goose や『わらべうた』にくらべれば動植物の出てくるものの割合が相当小さい。しかし、両方とも動物に示す関心のほうが植物より強いという傾向は Mother Goose と共通している。それはパーセンテージからも種類の数からも明らかである。どうやら Mother Goose における動物への関心の強さは偶然の結果ではなく、英国の風土・文化全般にかかわる傾向のようである。

6. 考 察

1,188 という数は決して多い数とは言えないが、そ

の 1,188 の Mother Goose の唄には英国の風土、文化、生活様式全般にかかわる本質的特質が濃縮された形で表現されているという印象を受ける。少なくとも特質の一部を知る手がかりが隠されていると言っても過言ではあるまい。

Mother Goose に植物より動物の唄が多く、それも哺乳類の唄が多いのは、英国が牧畜文化であるということのあらわれであろう。『わらべうた』には植物の唄が多い。動物では鳥類の唄が多いが、実はこれはスズメやカラスなど田畑を荒らす鳥の唄である。これは日本が農業に依存する文化であることを示しているのであろう。Mother Goose には魚介類の唄はあまり多くない。それに対して『わらべうた』では魚介類の唄が少し多い。これは日本が昔から漁業が盛んだったということを示しているのであろう。

牧畜文化は動物の肉を多く食べる。肉のにおいを消したり味をつけたりするには香辛料は欠かせないものである。このようなことが Mother Goose に風味用植物が多いことと関連をもつと思われる。風味用植物が多いということは簡単に言えば、香りと味、言い換えれば、鼻と舌の特徴である。

『わらべうた』に現れる植物は観賞を主としたものが相当多く、この点 Mother Goose と大きく相違する。これは日本人の植物好きを物語るものと思われ、俳句や生け花との関連を思い出させる。日本人のほうが一般に植物に対して日常、観察がこまかく、敏感に反応し、季節の移り変わりを感じとっている面があるのではなからうか。植物を見て楽しむということは視覚、目の文化の側面を表すと考えられないであろうか。

ここには直接関係ないが、日本人は西洋人より虫の音に対する観賞的態度が強いとされ、脳の機能の違いが指摘されることがある。そうだとすれば耳の文化の面も持っていることになり、英国（西洋）の鼻と舌に対して日本の目と耳という図式が成立することになる。これが Mother Goose や日本のわらべうたに限らないとすれば興味深い。

一般に中国人や英国人は実質的で堅実なものへの関心が強く、日本人は外面的なものに対する関心が強いと言われることがある。それがどの程度真实性をもつかどうかはともかく、英国と日本の童謡に現れる植物にその傾向が確かにみられるのは興味深い。

よく日本料理は味より見栄えと言われる。英国料理というものは特になく、昔から英国に入り込んでいると思われるフランス料理で考えると、フランス料

理は見栄えよりソースつまり味や香りと言われる。このような点も童謡の植物とのからみで頭に浮かぶ。

また、日本の料理の本は絵や写真が豊富なのに西洋のものにはまったく絵や写真のない文字だけのものがある。仮にあっても日本のもののほど多くないし、親切でもない。こういう点も外面と実質という対立関係を思い出させるものがある。

動物に関することをつけ加えておくと、Mother Goose に登場する動物は馬、牛、犬、豚、猫、ネズミ、羊、ガチョウ、アヒルなどが多い。一方『わらべうた』にはカラス、馬、牛、犬、猫、ウグイス、スズメなどが多い。両方に共通に見られる顔ぶれがあるがその意味合いが違うのではないかと思う。Mother Goose の動物の多くは牧畜と関係するが、『わらべうた』のほうは同じ馬や牛でも農耕用の家畜としてとらえられているようである。

7. おわりに

あらかじめ予想されたことではあるが、英国の風土、生活様式、文化、言い換えれば英国らしさが、Mother Goose によく写し出されていることに気付く。使用頻度の高い植物も低い植物も大部分は英国人の生活に密着している植物ではないかと思う。確かに頻度の 1 位 2 位を apple と plum が占めるということまでは予測できなかったが、結果が出てみれば納得させられるものがある。

童謡に出てくる植物(植物に限ったことではないが)がたまたまその童謡の性格を物語るだけでなく、その国の文化や生活様式、風土全般の傾向をも反映しているのは、童謡というものが現れては消え去る流行歌とは違い、長い年月の激しい淘汰を経て生き抜いてきたその歴史と伝統の重みをもつからであろう。

註

- 1) Oxford University Press, 1985.
- 2) 日本名は『ナーサリーライム・ハンドブック』となっている。研究社出版。昭和 60 年。
- 3) 各々の唄同士をいちいち原文で照合すれば 70 という数はもっと大きな数になるであろう。
- 4) かっこ内の番号は *A Handbook of Nursery Rhymes Volume I Text* の唄番号である。以下同様。

- 5) 「五月」の意の May と「サンザシ」の意の may が重なっていると考えられる場合も幾例があるようであるが、ここに載せた may は明らかに「サンザシ」とわかるもののみである。
- 6) 英語で「喉仏」のことを Adam's apple という。Adam が丸飲みしたリンゴが喉につかえたという言い伝えがあるが、このリンゴは実の小さい野性のリンゴのことであろう。Crab apple の実は梅の実位である。
- 7) 岩波文庫、岩波書店、1983 年。
- 8) 引用する際、一部を除いてルビを削除した。
- 9) Ronald Ridout and Clifford Witting, Pan Books, 1969.
- 10) The Beatles, Futura Publications, 1984.

参 考 文 献

- Opie, Iona and Peter. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. Oxford: Oxford University Press, 1984.
- . *The Oxford Nursery Rhyme Book*. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A Handbook of Nursery Rhymes*. Tokyo: Kenkyusha, 1985.
- Ridout, Ronald and Clifford Witting. *English Proverbs Explained*. London: Pan Books, 1967.
- The Beatles. *The Beatles Lyrics*. London: Futura Publications, 1969.
- The Reader's Digest Association. *Field Guide to the Wild Flowers of Britain*. London: The Reader's Digest Association, 1985.
- . *Field Guide to Trees and Shrubs of Britain*. London: The Reader's Digest Association, 1985.
- Launert, Edmund. *The Hamlyn Guide to Edible and Medicinal Plants of Britain and Northern Europe*. London: Hamlyn, 1981.
- Masefield, G.B.; M. wallis; S.G. Harrison; B.E. Nicholson. *The Illustrated Book of Food Plants*. London: Peerage Books, 1985.
- Perry, Frances. *The MacDonald Encyclopedia of Plants and Flowers*. London: MacDonald & Co. Ltd., 1984.
- Phillips, Roger. *Trees in Britain, Europe and North America*. London: Pan Books, 1983.
- Holden, Edith. *The Country Diary of an Edwardian Lady*. London: Michael Joseph and Webb & Bower, 1985.
- Room, Adrian. *Dictionary of Britain*. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修、成田成寿編集『英語歳時記 普及版』研究社出版、1983 年。
- 高嶋四郎・傍鳥善次・村上道夫共著『有用植物』（標準原色図鑑全集 13）保育社、昭和 56 年。
- 町田嘉章・浅野健二編『わらべうた——日本の伝承童謡』（岩波文庫）岩波書店、1983 年。
- P. ミルワード著『イギリス風物誌』（スタンダード英語講座 11）大修館書店、1985 年。
- アト・ド・フリース著『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1985 年。
- 赤祖父哲二編『英語イメージ辞典』三省堂、1986 年。
- 平野敬一著『マザー・グースの唄——イギリスの伝承童謡』（中公新書）中央公論社、昭和 47 年。
- 平野敬一著『続マザー・グース童謡集』（エレック選書）英語教育協議会、1984 年。
- 渡辺 茂編著『マザー・グース事典』北星堂書店、昭和 61 年。
- 宮川幸久・篠塚久美子・三好みゆき共編『マザー・グース童謡集』日本英語教育協会、1986 年。
- 広田靚子著『HERB BOOK 広田靚子のハーブブック 栽培と楽しみ方』山と溪谷社、1985 年。
- 桐原春子著『ハーブのある暮らし 用い方・楽しみ方』じゃこめてい出版、1986 年。